

## 連続セミナー

# 「FD を考える」<sup>2</sup>

## 「学生による授業評価」とFD 活動

シラバスと授業評価・SFC における 12 年の推移

総合政策学部教授 / 湘南藤沢中等部・高等部部長 井下 理



### はじめに

湘南藤沢キャンパスは 1990 年に神奈川県藤沢市（10 万坪）に開設した。開設当初は、総合政策学部および環境情報学部の 2 学部、学生数は 4,500 人、教員数は 120 名、職員数は 80 名という規模であった。

「学生による授業評価」には社会調査法に関する正しい知識が不可欠である。教育改革のセッ

トのひとつであった授業評価は、初期には名称こそなかったが、自主的に FD に取り組んでいたといえるかもしれない。

「学生による授業評価」は、程度はさまざまではあるが、文部科学省高等教育局の調査によれば、2001 年度現在、513 大学（76%）が何らかの授業評価を実施している。最近のテーマは、その結果を使ってどのように授業を改善してゆくか、ということにある（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/001/03102101/006.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/001/03102101/006.htm) 参照）。

### FD とは？

教員一人ひとりの開発・成長・発達・強化と捉えることができる一方、Faculty を教授団、教授者集団、教授組織と捉えることができる。したがって、FD とは教授団能力の開発・育成とすることができる。

FD の上位概念は組織開発（Organizational Development）である。組織開発のためには、教員のみならず職員の開発・育成も大事な要件である。

FD を実施している大学は年々増加し、2001 年度の上記同調査によれば 409 大学（61%）で実施されている。

### SFC の「学生による授業評価」の仕組み

SFC における同時多発的な授業改革のひとつとしてスタートした。SFC の特徴は授業評価のみが注目されるべきものではなく、シラバス、セメスター制、インテンシブ外国語教育、情報処理教育、TA・SA 制度、オフィスアワー、キャンパスネットワークシステム（CNS）、その他さまざまな授業改革の仕組みの中での授業評価である。

The Keio University  
Faculty of Liberal Arts

### (1)趣旨と目的

授業改善のため、授業技能の向上のため、学習意欲の喚起と向上のため、教育理念実現のため。

### (2)経緯

1990年の開設当初から、大学事務局、教員、学生、外部解析会社の共同作業によって実施。結果の取り扱いに関しては、2大原則が存在。

原則1 . 個別結果の非公開

原則2 . 人事考課に用いない

2002年度からは、Webによる調査に切り替え。

### (3)方法

1. A4の自記式質問紙による集合調査
2. 表に16問の5件法によるclosed設問、13問は固定質問、3問はオプション選定
3. 裏に自由記述式の3つの回答欄
4. 各学期の最終週およびその前週の授業時間内に一斉に実施
5. 印刷などは事務局で準備し、教員が教室へ持参して配布し、学生が記入、回収して事務室へ直接提出
6. 事務室では点検後、集計分析を外注
7. 集計後、クロスデータなど結果の返送
8. 調査原表も集計結果と共に教員に返却
9. 調査票の裏をよく読み改善へ

結果はビデオにして、学生には毎学期のガイダンス時に、教員には教授会にてそれぞれ報告しているほか、報告書も作成している。

作業量が多いがミスがあってはならない。社会調査の技

法、管理上の手続きを厳密に行う必要がある。

「授業が良くならないなら、授業調査にそんなに時間や費用をかけても仕方がない」、「公表されなければ意味はない」といった反応もある。

### 結果

授業全体の評価は2000年までの平均は5段階評価で、3.89。2001年に非常勤を増やし開講科目を増やした結果、2001年は過去最高の3.99となった。科目カテゴリ別の推移を見ると、ウェルネス科目(体育群)は開設当初から高い評価を得ており、2000年は4.37と非常に高い評価を得ている。外国語科目も開設当初から高い評価が得られており、ここ4年間もさらに評価が高まっている。情報処理科目は、年によって変動があるが、2001年は3.88であった。授業クラス規模別の評価結果では、50名以下のクラスの評価が高い。

### 授業評価の活用

#### (1)個人レベルでの活用

よかった点、改善すべき点、平均との差および相対的地位の確認、実績への確認(自覚・思い込みの是正)、向上意欲の喚起、努力目標の設定

#### (2)集団レベルでの活用

集団間の競争と協力、個人競技から団体競技への意識変換

#### (3)組織レベルでの活用

カリキュラム体系の点検・評価、個人競技から団体競技



への意識変換、組織目標・理念の確認、方法についての共通認識

## (4)社会レベルでの活用

証明書の発行、教育活動への価値の確立、研究と教育との連携・バランス、社会レベルでの高等教育の価値普及

## 「学生による授業評価」の課題

- 1 目的の再確認
- 2 システムの構築と維持・運営管理
- 3 限界と課題を常に意識して運用
- 4 個人・集団・組織の間の温度差
- 5 教員・職員・学生の意識改革
- 6 他大学・他の業界と自己との相対化
- 7 方法への探求/持続する発展

## まとめ

学生による授業評価は次の7つの発展段階がある。

第1期：氷河期

第2期：黎明期

第3期：導入期

第4期：普及期

第5期：再検討期・再吟味期

第6期：第1次変革期/改良・改変期

第7期：第2次変革期/脱皮・衰退・発展期

授業評価をやっていれば授業は良くなるのか。やっていても授業はそのままの場合もある。お金をかけてやっているのだから、別のことに使うべきかも考える必要もある。あるいは、頻度、方法、公表について検討し、内容や名称も変えてゆく必要がある。

SFCは紙による方法をやめWebで行う方法に変えた。回数や、設問によって公開非公開は教員が判断することができる。ただし、回答率は変化していない。回答していない学生に対しては督促メールが届く仕組みとなっている。

## FDセミナーに参加して

連続セミナー「FDを考える」の第2回として、井下理氏による「『学生による授業評価』とFD活動」と題する報告が行われた。

当感想文の筆者は以前SFCの教壇に立ち、学生により毎学期、辛辣極まる評価を下され続けた経験を有するので、SFCにおける授業評価に関する「自己批判」を興味深く拝聴させていただいた。

授業評価をはじめFD活動全般が、文部科学省からの助成金目当てのものではなく、あくまでも授業改善のための自主的・積極的意味合いを有するものである、ということに話の中で敢えてまず言及しなければならないところに、日本の高等教育機関におけるFD活動の浅薄な現状が透けて見えるように感じられた。

無論、興味深い指摘も多くあった。たとえば、授業評価の結果報告を報告書ではなく、報告VTRとしている点。授業評価に限ったものではないが、学生生活に関する調査は慶應義塾学生総合センターにより従来実施されており、定期的に詳細な報告書が発行されている(当感想文の筆者も以前学生部委員として、莫大な時間と労力を割いて報告書の作成に携わった)が、「教授の講義内容があまりに低レベルである」という学生の嘆きをどれだけ教員が、あるいは「窓口の係員の態度があまりに不遜である」という学生の訴えをどれだけ職員が、報告書の中で目にしたのであろうか。自己目的化してしまった分厚い報告書など、まさに助成金目当てのものでしかなく、教育環境の改善とは何の関わりも持たないであろう。

## 七字眞明(経済学部)

より重要であると思われたのは、データ蓄積の必要性である。教員・学生相互の批判・評価が、他との比較が可能であるという限りの意味において、ある程度の客観性を持つものとして機能するためには、授業評価が継続的に実施され、データが蓄積されていくことが不可欠であろう。にもかかわらず、データ蓄積を推し進めたSFCにおいてさえも、授業評価が授業の改善に寄与していないと不満を表明する学生数が近年増加している、という調査結果の報告は、授業評価のフィードバックがいかに困難な作業であるかを予想させるものであった。

いわんや、羽田所長の指摘を待つまでもなく、SFCとは状況が異なり授業評価の体制がまったく整っていない日吉・三田地区において、データの蓄積を行うことはほとんど不可能としか思われず、FDに関心のある一部の教員により自発的に活動を組織化していく方が、組織全体に授業評価を同時に導入するより結果的にはよいのでは、という報告者の発言からは、義塾における足並みの不揃いに対する苦く、かつ厳しい認識がひしひしと伝わってきた。何故、塾長によるトップダウン形式により全学的に授業評価を導入することを早急に決定しえないのであろうか。教員個人の自主性などというものを信用していたら何一つ進展しないのが大学という組織に他ならないことは、今回の報告会に自ら希望して学生が参加していたのに比し、全体からすればあまりに僅かの教員(17名)しか出席していなかったことが如実に物語っているのではないかと思われた。

# 質疑応答

- Q 出席している学生に調査をしてもいい結果が出やすいと思われる。受講生の何%が授業評価に参加しているか？ また、出席者数とも関係するのでは？
- A 科目間で異なるが、平均すると5割が参加している。出席者数と関係すると思うが、学生は授業評価の意味を理解してきているので、冷静な判断がなされていると思う。
- Q いい先生といい学生が集まると良い結果が出ると思うが、サボりたい学生とサボりたい先生の組み合わせでも良い結果が出る可能性は高いのか？
- A そうでもない。授業評価に真剣に答えているかを回答させている。学生はまじめに答えている。楽勝科目が良い結果とはならない。悪い学生は回答しないし、悪い先生は結果を見ない。授業評価の意味を学生に理解させ、授業評価が、教員のやる気を引き出すということも教育していく。しかし、授業評価の結果が給与査定につながると、必死に結果の情報操作をするので、問題が起こる。そうならない方向を考えていくことが重要。
- Q 授業の改善方法に決め手がない。どうやってフィードバックをかけるのか？ 授業改善のHow toの蓄積はできているのか、それともその場その場で対応しているだけなのか？
- A 結果として、個々人の意識・自主性に任せている。教員を評価しないで学生が自分の興味のある科目を選択できるように、SFCではSFC-SFSというWebを用いた新しい授業評価システムを導入し、改善しようとしている。京都大学のように授業参観をして、授業が終わったら隣の部屋で授業検討会をするというような改善案などもあるが、授業にも各先生にも違いがあるから有効とはあまり思わない。授業改善・授業評価を上から強制すると逆に時間がかかると思われる。個々人が授業評価の意味・意義を考えないと結局良くならない。
- Q コンテンツは魅力的でも授業の教授法が悪い場合はどうなるか？
- A コンテンツは同じで教員は異なる、あるいはその逆を行い、チームとして考えれば良いかもしれないが、フィードバックがかからないので難しい。新任教員に対してだけでなくティーチングのやり方を教えてくれる会や場があると教育が進展すると思う。
- Q SFCと違い従来からある学部では歴史があるので、FDが難しい。こ

のような場合に良い方法は？

- A やりたい人・やる気のある人がどんどんやっていき、そのようなコミュニティを作って、否定的・関心のない方を引き離していけば、底上げになると思われる。やらない先生は気がつく引き離されているという状況を作る方が、そのような先生に目くじらをたてているより早いし、コミュニティが進展していけば楽しんだ雰囲気もできてよいと思う。
- Q 英語でも学生は、どの先生の教え方がうまいかに関心がある。個人の先生の評価は、学生に伝わるのか？ それで、教員は改善するのか？
- A 学生が均質であればよいが、同じように満足度が高く、評価が同じスコアでも内容が違う。ビデオを撮ったりして、調査をしないと細かくわからない。社会調査法をうまく使って、調査システムを改善していく必要がある。企業の品質管理のように厳密に自己評価・自己点検をしていかないといけない。
- Q シラバスが毎年同じではないかなど、そのような数年に渡る調査をしているのか？
- A ほかの先生のシラバスがどう変わっていったりかなどは調べていない。シラバスの交換や同じグループで意見交換したりするのが良いと思う。これまでは、公開してこなかったが、SFC-SFSの授業評価システムでは、そのようなことができるようになるかも。
- Q 数学受験でない学生を初めて教えたので、初年度のSFCの授業評価票を使ってみたが、数学には、不適切な設問もあった。科目によって質問票を変えているのか？ 授業を不真面目に受けている学生の自由記述がひどかったがどうすればよいか。学生の授業を受ける態度を良くするために学生自身の受講態度を聞いてみるのはどうか？
- A 科目による違いを改善するためオプション設問を設けた。科目間で比較するためには、科目に関係ない満足度などの質問事項を比較すればよい。先生が適宜参考になるものを使えばよく、不必要なものは無視すればよい。耳を傾けないと改善はされないが、中には不適切なものもあるので、あまりそれを気にしてもいけない。学生に授業によく出席したかなど、学生の自己評価をさせる項目を3つくらい設けているので、教員と学生がお互い評価しあっているという状況ができていくと思う。お互いの情報をやり取りし、交換できるようにと、新しいSFC-SFS授業評価システムに変えた。

## 「コメントシートから」

今回は、井下先生からのご提案で聴衆にコメントシートを配り、講演に対する意見を書いてもらった。そのうちいくつかを紹介する。

「授業評価の集計・分析・結果報告を外注することで教員負担の軽減、詳細な分析、適格な信頼性の高い結果報告が得られることを実感した。予算を計上して導入すべきであると思う。(法学部)」

「信濃町キャンパスでは学生の意見を学部伝える手段がないに等しく、授業評価が全塾に広まるよう望んでおります。5件法による評価は集計しやすいですが、自由記述に授業改善のヒントがあるように思います。自由記述の部分も組織レベルで活用されているのか伺いたかったです。学生側から教授法の提案をうけるような設問があったらよいのでは、と思います。「この授業をよくするために、あなた(学生)ならどうしますか?」など、授業を改善していく場合に、それをサポートしてくれる人が大学にいたらいいと思いました。(医学部)」

「SFCでの授業評価について具体的にイメージが得られたこと、特に、賛否はあっても原則について貫かれたことについての感想は参考になりました。本当はシラバスの件にも関心があったのですが、履修案内より先詳しく授業計画が示されることにより、スタッフからのサポートに役立っていることを期待しています。(日吉メディアセンター)」

## 小林宏充(法学部)

「SFCでの学生による授業評価のシステム(制度)の目的がよく解りました。このような制度は、主旨が学生自身に十分伝わること、その成果が自分たち学生に還元されていくものと意識してもらえるように周知を工夫することでうまくいくものと思いました。日吉でスタートする場合、やる気のあるメンバーでやっていくのが良いのでは、との先生の意見に個人的には賛同します。(日吉学事センター)」

「当事者間同士だけで決めるのではなく、第三者的立場の機関にその教室で90分間に起こった出来事を評価してもらえばよい。あと、授業評価は授業を良くするためですが、そもそも良い授業とは？何が良い授業でしょうか？僕は最終的な教育とは自己訓練に行き着くと考えます。先生、教師の方々にはその「きっかけづくり」を求めています。(文学部学生)」

慶應義塾大学教養研究センター Report No.2  
研究推進セクション(担当:小林宏充/市古みどり)

2003年12月25日発行  
代表者 羽田 功

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1  
TEL: 045-563-1111(代表)  
lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp  
http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/